

書評

Онисси Хироси, *Российский Путь в
Капитализм и Японский Путь в Посткапитализм,*
Наука, Москва, 1994 (Пер. Кримова, В. В.)*

セルゲイ・マレーエフ

「歴史はそう簡単には後戻りしない」。このように大西広氏は主張し、この点で我々に同意を求めている。歴史は前進したり後退したりするものであるが、例えば18世紀イタリアの歴史家J. ヴィーコが考えたように、一か所にとどまったり、堂々めぐりをしたりすることは決してない。もし、歴史において、過去への回帰が観察されるならば、これは、過去に向かうかのようにみえる回帰である。そして、何かある種の過去の酒杯の形態を、まじめにかつ意識的に模倣しようとする試みは、すべて茶番劇となる。

著者はマルクス主義者である。著者は、現代の社会的発展を志向する自分の見地において、マルクス主義方法論を確立しようと努力している。そして、マルクス主義方法論の見地からすれば歴史において、社会の「標準的」「非標準的」形態なるものは存在しない。なぜなら、歴史の本質において、歴史はどうあるべきでどうあってはならないか、ということはおそらく基礎づけられないからである。個々の時代は、進歩的(時代)あるいは反動的(時代)として評価される。しかし、これは、具体的分析を要求する。すなわち、どのような点に関して進歩的で、どのような点に関してそれは反動的か。歴史における絶対的進歩という考え方は、マルクスが考えたように哲学的思弁の結果であり、科学的分析の結果ではない。「標準的」という用語における全く同じ評価(「非標準的」という点で我が国の「民主主義」の産みの親は誤ったし、今なお過ち続けているとする)は、全く

イデオロギー的であり、全く科学的ではない。大西広氏の本の価値および我が国の現在の事態にとってのその本の独自性は、日本における状況と比較して、我が国の現在の状況の科学的分析を試みていること、つまり本の題名に表現されていること、まさにこのことである。

そして、イデオロギー的評価について触れた関係からすれば、レーニンへのイデオロギー的非難の原因についての著者の議論は、このことに関連して興味深い。レーニンおよびレーニン主義弾劾の原因は、著者がみならずところによれば、最近初めて公開されたレーニンの生活および活動からの新しい事実のなかにはなく、最近生じた価値観の見直しにある。そして実際に、もし30年前にソビエト市民にレーニンの凶悪な性格に「開眼」させ、彼が何百人ものクラークを絞首刑にするよう指示したことを語ったならば、市民は次のように答えたであろう。レーニンは正しかった。クラークを絞首刑にすることは必要であった。さもなければ、私たちは革命で敗北したであろうと。

大西広氏の本において検討されている問題は、一方でポスト工業社会の問題に属し、他方で社会主義の問題に属する。著者は、人類の将来を社会主義のなかに見いだしている。しかし、著者は社会主義を、社会主義政党による政治権力の掌握とではなく、また「収奪者の収奪」とでもなく、生産力の内在的発展および質的に新しい水準へのその移行(これはもう既に現代の先進国、第一に日本において生じている)と結び付け、その時資本主義利潤の抽出の(言い換えれば搾取の)通常の方法は簡単には技術的に

* Сергей Мареев, "История так просто не возвращается", *Япония Сегодня*, № 172, 1995. 1, の翻訳である。

できなくなる、とする。

著者はこのような社会主義を、資本主義以前の社会主義とは異なる、資本主義後の社会主義と呼んでいる。著者によると過去の我が国の「社会主義」は前者に属する。著者は、資本主義以前の社会主義の歴史的位置を資本主義への移行の前提条件を創造するという事に確定している。言い換えれば、資本主義への移行の歴史的役割は、工業化を実現することにあった。

一般に、それに従えば我が国の「社会主義」が資本主義後ではなく資本主義にかわるものだとされるところの、考え方は、既に我が国にとって新しくない。しかし、ここで大西広氏が答えていない問題が生じる。すなわち、20世紀後半になってから「社会主義」の道に沿って動きだした諸国は、なぜ初めから「標準的」資本主義の道に沿って動き始めなかったのか、ということである。これを、共産主義者の「破壊活動」として説明することは、絶対に許されない。なぜなら、例えば、J. ネルーとINK党（インド国民会議派）の指導下のインドのような国は「社会主義」を建設したのであるが、そうした人々は、共産主義のイデオロギーによって導かれなかっただけでなく、それに対して距離をおいていた。

そこで、いわゆる市場経済の内在的法則の自由競争のもとで、経済的従属関係や経済的後進性から決して抜け出せなかったために、「社会主義」の道へたちあがった諸国の特殊性の検討におそらくはいらなければならないであろう。ここでは、臨時的で政治的な措置が必要であった。全体としてこれは、「社会主義」という媒介による民族的救済である。ちなみに、マックスウェーバーは、17年の我が国の革命以前に、そして18年のドイツ革命以前に、もう既に次のように主張した。20世紀初頭の条件のもとでの社会主義は、民族的社会主義でのみありうる。社会主義は、一方で、個々の個人の利害についてはもう既に言うまでもなく、個々の階級および社会的集団の諸利害に対して、他方で、他の民族の諸利害に対して、民族の諸利害の対置を

生み出さずにはおかないような国民の力の動員および結集を要求する。

日本のような国で現代的な社会主義が生じているのは、全く異なる基盤の上においてである。著者は、大変頻繁に自分の本の中で、いわゆる「ソフト化」に触れている。ソフト化（英語のsoftwareから派生）と呼ばれているのは、非物質的精神的生産手段の発展である。ここには、科学的知識、情報、デザイン、コンピュータープログラミングなどが含まれる。しかも、まさにこの知的設備と関連する消費の部分は、完成生産物の価値において最近急速に増大し、しばしばもう既に物質的消費をしのいでいる。

しかし、問題はここでは、純粋に量的な指標においてだけではない。問題は、ここでは他の指標において存在する。すなわち、この生産手段の大量の利用。すなわちソフト化は、人間の諸関係の質を変える。

ここで、次のことに気づかざるをえない。すなわち、著者は、確かにマルクス主義者であるのだが、マルクスの「普遍的労働」概念をそんなにはっきりとはおそらく理解していないであろうということである。すべての問題は次の点にある。すなわち、現代のソフト化は、初期の古典的資本主義の時代における労働の分化という状況から生じたところの、ほかならぬ裏面の統合である。局部的労働者、つまり、所有主の意志と知力とによって管理されている、何らかの全体的生産組織に基づいてのみ労働することのできる労働者のような人間像が、その時代にとって特徴的である。これは、局部的労働者の局部的労働である。反対に、普遍的労働とマルクスが呼んだのは、「様々な科学的労働、様々な発見、様々な発明」である。

逆説は、次の点にある。すなわち、普遍的労働は、個人経営者において遂行されうるということである。この普遍的労働の特徴に、大西広氏はこの用語を使用してはいないとはいえ、気づいている。すなわち「理論的には、例えば（彼の述べるところでは）ひとりひとりの個人が大きなコンピューターを借りし、かなり大

きな規模の仕事に取り組むことは可能である。」

コンピューターは、(かつての蒸気、そしてその後の電気と同様に)大革命家である。問題は、コンピューターの助けで遂行することのできる仕事の規模にあるだけではない。問題は次の点にもある。すなわち、もう既に述べたように、コンピューターは、人間諸関係の性格を変えるということである。すなわち、このような生産手段をもっていけば、わたしは、もう自分の労働力ではなく、自分の労働の生産物、自分の労働を売ることができる。このことは、マルクスによれば、いわゆる単純商品生産の、資本主義との本質的相違である。歴史は、あたかも再び単純商品生産の方向に向かって後戻りしているかのように見える。しかし、歴史は「そう簡単には後戻りしない。」

これは、もう既に、人間の人間による搾取ではない。これは「結構な」ことだ。しかし、これは、自分自身の搾取である。普遍的労働の領域では、わたしは自分自身のところで雇われて働くことができる。それはちょうどかつてこれが最初の資本蓄積の時代の労働に基づく利潤追求の自己搾取という条件のもとにおいて存在したのと同じである。いったい、これがなぜ「悪い」のか。

全ての問題は次の点にある。すなわち、この条件のもとで、人間は形式上自分自身のところ

に雇われて働くだけではない、ということである。人間は、実際には、一方で、普遍的労働の主体へ、他方で、私的個人へと分裂する。ここでは、二つの全く異なる特性をもつ、敵対的でさえある諸力(競争力)が、一つの方向に統合し、活動する。なぜなら、問題は個人の生産物の販売にあるにもかかわらず、知的生産物の市場およびしばしば人間を夜の間ずっと眠らせない創造活動の力が存在するからである。

ここから、「カローシ」(労働の間に過労が原因で死ぬこと)のような、著者によってしばしば言及されている現象が生じる。逆説は次の点にある。すなわち、過労からは奴隷でさえ死ななかったということである。人間を、殺したり、苦しめたりすることはできるが、彼自身がこれを望まないならば、過労させることはできない。過労——これは、強制の結果ではなくて、労働への自己強制の結果である。

人間の本質の疎外は、自己疎外に変わる。さて、市場「社会主義」という条件のもとでの自己疎外を取り除くことはできるか。これは、このよく考えられた本によって成されたことの有益さは疑いの余地がないが、この本の著者を含め、今に至るまで未解決のまま残された問題である。

(訳 木下秀雄)